

## 「文献資料から見る鹿児島高等農林学校」

丹羽謙治

平成27年11月29日（日）

鹿児島大学農学部の前身に当たる旧制鹿児島高等農林学校は、明治41年（1908）に創設された。その目的は、南方の資源開発や植民地経営に関わる人材育成を主とするものであった。実習を中心とした技能教育、人格教育が行われた。当初、農学科と林学科合せて1学年60名程であり、エリート技術者養成機関といえるものであった。

今回は高等農林学校の歴史を、「6」「6」「10」という三つの数字のつく年、すなわち大正6年・昭和6年・昭和10年の事件を中心に眺めることにしたい。

—大正6年（1917）—

戊辰戦争戦没者の五十年祭の年に当っており、さまざまな行事が行われた年である。鹿児島では、これを記念して探勝園に島津斉彬・島津久光・島津忠義の三公の銅像が建てられ盛大な祭典が行われた。これより先、11月8日・9日の両日、鹿児島県立図書館（当時は現在の鹿児島県民交流センターの敷地にあった）で日本図書館協会九州支部総会が開催され、同協会総裁の徳川頼倫侯爵（紀伊徳川家当主）、会長の和田萬吉東京帝国大学図書館長、九州各地の図書館長らが来鹿、島津隼彦男爵初め鹿児島の名士も多数来賓として招かれた。二日目の9日には史蹟の視察が行われ、その一環に高農の「古書展覧」があった。高農図書館に農書全260点720冊が展示されたが、その多くは小出満二教授の所蔵にかかるものであろうと推定される。

一方、この年、九州農科大学を新設する方針が打ち出され、九州各県が誘致合戦を繰り広げた（九州帝国大学の農科大学設置で決着する）。大正7年12月に大学令・改正高等学校令が公布され、これに基づき、9年4月に東京高等商業専門学校が初の官立単科大学、東京商科大学に昇格すると、各地の専門学校で猛烈な昇格運動が展開され、鹿児島でも「悲願」の大学昇格にむけて演説会や提灯行列が行われたが、結局実現せずに終わる。

大正6年（1917）には県の史蹟名勝記念物調査会—小出教授らがメンバー—は、鹿児島市に対して鹿児島市の城山の自然の保全に関する意見書を提出しており、昭和6年に起こる城山自動車道問題の伏線となっている。

—昭和6年（1931）—

前年の昭和5年（1930）7月、樺山可也鹿児島市長が在郷軍人会の協力のもと、城山に自動車道路を建設するという計画を発表したが、岡積勇輔を中心とする敬天舎の人々が「城山傷かんとす 甕城人なきか」を合言葉に反対運動を展開、それに高農の岡島銀次教授が会長を務める鹿児島博物学会、鹿児島林学会などが加わり、文部省など中央を巻き込んだ騒動に発展した。一連の反対運動を受けて、文部省は、史蹟名勝天然記念物保存法により

城山の北東部を「天然記念物・史跡」に指定、事実上建設された自動車道路は一般車の乗り入れができないことになった。

—昭和 10 年（1935）—

昭和 10 年 4 月、第三代校長に就任した草野嶽男は、老教授の更迭を行い人心の刷新を図ろうとした。これに対して、卒業生や学生が反発、一部の学生はストライキも辞さない構えを示し、校長排斥運動に発展した。安藤廣太郎（西ヶ原農事試験場長、農学博士）が調停に入り、校長を文部省督学官として欧米視察に赴かせることとする案を提案、問題の三人の教授へは説得を行い、鎮静化を図った。草野校長は昭和 11 年 9 月、文部省督学官として欧米に赴き、代わって小出満二が校長に就任、岡島・川島・萬年教授が退官して漸く事態が収拾された。

上記の騒ぎの中、昭和天皇の高農への行幸が決定、3 か月半にわたる準備が進められ、11 月 17 日に行幸が実現した。教授・名誉教授の拝謁、校務の概要説明ののち、4 名の教授の研究実績と研究品、および巨大な「鹿児島県鳥瞰図」が天覧に供された（この図は農学部長室に現存）。皇太子時代のお手植のイチョウ（現存）をご覧になったあと、植物園・農場へ移動、生徒の実習の様様を「御野立所」からの御覧になった。

今回取り上げた大正から昭和の初めにかけての事件に共通するのは、教員と学生の熱い思いと行動力である。今回の展示の題を「旧制鹿児島高等農林学校の底力」と題した所以である。